

留学生と日本人学生の合同授業の創出

花 見 楨 子

Creating a Joint Study Class for Japanese and Foreign Students

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

This article summarizes the making of a joint study class for Japanese and foreign students at the Center for International Students (CIS).

Foreign students who come to Mie University without sufficient Japanese command normally engage themselves in Japanese language courses at CIS. This means that they spend most of the time of the day with their fellow foreign students and that their chances to interact with Japanese students are limited. Those who have reached upper-middle or advanced levels can develop their language command more effectively through opportunities to communicate with Japanese students. Japanese students can also benefit from such opportunities which will lead them to cross-cultural understanding and train them to be able to survive in the global environment. Thus, CIS decided to accept Japanese students into advanced courses.

Once it was announced, numerous Japanese students beyond the capacity at CIS applied to the course. After the selection procedure, 12 foreign students and 18 Japanese students were accepted and were divided into three discussion groups. The groups were engaged in discussions under the topics given by the instructor or chosen by themselves. The students took turns to chair the discussions and submitted mid-term and final written reports. Details of these processes are provided in the article. Overall, the students' enthusiasm with the class work was confirmed in their high attendance rate and course evaluation.

キーワード：留学生、日本人学生、合同授業、討論、異文化理解

はじめに

まず、留学生と日本人学生の合同授業の意義とこれを開始するに至った経緯を述べる。

留学生センターの教育活動としてはこれまで、留学生を対象とした日本語教育を主に行ってきた。留学生は、初級から上級までの日本語を習得することを通してようやく日本人学生と共に日本語での専門科目を受講するに足る日本語力を身につける、というのが建前で

あった。しかし、折角日本に来て勉強していながら、留学生が日本語の授業のなかに囲い込まれ、日本人学生と接触する時間がほとんどないのは、彼らの日本語上達の観点からみても矛盾している。初級の間はまだしも、中級から上級に進むに連れて彼らの日本語によるコミュニケーション力は向上し、実践の場をより多く求めるようになる。とは言っても、いきなり日本人学生と共に専門教育を受講するのは大きな飛躍であり、相当の無理がある。中級の上から上級に達した学生たちが日本語力をより効果的に向上させるには、留学生に配慮した合同授業でなければならない。また、日本人学生にとっても、留学生とのコミュニケーションは異文化理解への道であり、国際化時代に対応する訓練の糸口となるだろう。

そこで、共通教育（全学の学部生を対象とした一般基礎教育）が、各学部の専門教育科目の一部を共通教育へ開放する（他学部の学生の履修が可能になる）ことを募るようになった 2005 年度前期より、上級の日本事情科目に日本人学生を受け入れ、かねてより念願の留学生と日本人学生の合同授業を試みることにした。留学生センターが提供する留学生向けの科目としてはこれまで通りの「上級日本語：日本事情 2A」であるが、共通教育に開放された科目としては「留学生と共に学ぶ日本社会と文化」という科目名をつけた。

一体何人くらいの日本人学生が受講することになるかは全く検討もつかなかったが、「日本事情」の授業は毎学期 5、6 名から 7、8 名の留学生が履修しているので、日本人学生と合わせて 15 名程度かそれ以内のクラスになれば、討論を主体としたセミナー形式の授業がもてると考えた。

1. コース前半の構成

授業第一日目、予想をはるかに超えて、50 名近い日本人学生たちがやって来た。留学生は 12 名（中国 7 名、韓国 3 名、ドイツ 1 名、コロンビア 1 名）であった。授業内容を説明し、来学期も受講可能であることを告げ、それでもなお今学期に受講を希望する日本人学生には、受講希望理由と抱負をレポート用紙一枚以内に書かせ、選考することにした。留学生センターには 30 名収容できる教室が一室あるだけであとは小さな教室しかない。留学生とのバランスも考えねばならない。

結果、日本人学生 18 名に受講を許可し、留学生と合わせて 30 名という予想外の大編成となった。これを、留学生 4 名、日本人学生 6 名ずつの 10 名のグループ三つに分けて討論を行うことにした。

授業二日目、初顔合わせの受講生たちをグループに分けて座らせ、各自の名札を作らせ、自己紹介後、「花見」を最初のトピックとして与えた。季節は花見を終えたばかりの 4 月半ばであり、誰にも準備なしで取り付きやすいトピックと考えたからである。討論を始めるに

当たって、各グループで日本人学生 1 名を座長に指名した。討論が単なるおしゃべりにならないように、座長は発言者を公平に指名し討論の流れの舵取りに努めるよう役割を説明した。しかし「花見」をめぐる最初の討論はさほど発展性が無かった模様である。各自の花見体験や外国にも花見があるかといった話の後、留学生が、伝統文化としての花見の由来等について関心を示したのに対し、それに答える立場に立たされた日本人学生たちが古典文学や歴史に関する知識をほとんど持ち合わせず、話題が途切れてしまったのである。

次に、シラバスにも載せてあった討論の全トピックについて受講生たちの関心度を調査し、筆者が用意したもの以外で討論したいトピックも書かせた。シラバスに載せておいたトピックへの関心度は表 1 のとおりである。なお、これらのトピックの大部分は、中・上級日本語テキスト（東・小川・西陰 1995；近藤・丸山 2001；佐々木 2001；山本 2001）から選んだ。

表 1. 討論トピックへの関心度（有効回答数 28 名）

	討論したい○	興味が無い×	どちらでもない
* 若者の感性	16	0	12
日本の中小企業	2	10	16
仕事への意識	11	3	14
* 日本の外国人	16	1	11
豊かさの意味	13	3	12
タテ社会	7	4	17
恥の文化	15	0	13
単身赴任	3	6	19
過労死	2	6	20
年功序列	2	5	21
日本人の宗教	10	5	13
日本人のコミュニケーション・スタイル	3	1	14
ジェンダーと家族	7	4	17
ジェンダーと労働	4	4	20
農業と食糧	3	9	16
* 日本の教育問題	14	1	13
日本人と国際交流	15	1	12
日本の伝統芸能	8	3	17
日本の伝統芸術	6	5	17
* 男ことばと女ことば	19	1	8
漫画に見る社会問題	7	2	19
メディアの中の暴力	11	1	16
インターネットの影響	8	1	19
日本人と祭り	9	4	15
フリーター	11	1	16

以上の中から、*印をつけた4つのトピック（男ことばと女ことば、若者の感性、日本の外国人、日本の教育問題）を選びコースの前半で取り上げることにした。なお、日本の教育問題」よりも「日本人と国際交流」の方がわずかに関心度が高いと言えるが、このトピックは「日本の外国人」に近いトピックであること、「日本の教育問題」については配布資料があるが、後者にはないことから、「日本の教育問題」を選んだ。

最も関心度の高かった「男ことばと女ことば」を次回のトピックに指定し、各自話題を用意してくるよう掲示を出しておいた。次いで、「日本の外国人」、「日本の教育問題」、「若者の感性」の順に毎回トピックを変えて討論を行うこととし、これら3つのトピックについては、留学生向けの中・上級の日本語テキストより資料を用意し、前もって全員に配布した。（近藤・丸山 2001）

また、座長は日本人学生が毎回替わり番に務めることとし、座長としての経験について、討論がどのように進んだか、何が難しかったか等についてレポートにまとめ提出させた。

以上でコースの前半を終了し、全員に以下のレポートを課した。

トピックをひとつ選んで、どんな討論が展開されたか、どんな意見や質問が面白かったか、あるいは意外だったか、日本人と留学生との感性や考え方の相違はあったか、討論はうまく進められたか、問題があったか、その原因は何か等々について、レポート用紙2枚以内にまとめること

この中間レポートは、課題を満たしているかどうかについて合格または不合格の判定のみを行った。最初の判定で数名が不合格（ひとつのトピックについて自論を述べるだけのレポートになっていた）となったが、書き直しを指示し、最終的に全員が合格した。

2. コース後半の構成

コースの後半では、まず第一回の授業で、前半の総括（前半の討論を筆者が観察した結果と受講生が提出したレポートへの講評を中心として）を行い、後半の討論の進め方および期末レポート課題の説明をし、そのあとで新しいグループに分かれて自己紹介や前半の討論の感想を話し合い、役割分担（後述）を決めた。

コースの前半で、筆者が用意したトピックの他に、受講生が討論したいトピックを書かせ、それらについても全員の関心度を調べてみた。その結果は以下の通りであった。

表2. 受講生が提案したトピックへの関心度（有効回答数 29 名）

	討論したい○	興味が無い×	どちらでもない
▲外国の中の日本人	11	2	16
著作権問題	2	10	17
日本の皇室	5	4	22
子育てや保育	7	6	16
○外国から見た日本の印象	4	2	13
（北朝鮮や中国との歴史的な問題などについて、実際日本に不満があるのか）			
国という概念	7	4	18
△異なる国の人々の相互理解	8	2	19
△コミュニケーションの重要性	9	0	20
○海外のマスメディアが報道する日本	8	5	16
家族や親戚とのつながり	10	4	15
日本と外国の笑いのつぼ	8	4	17
世界中の紛争についての各国の考え方	4	4	21
○今起きている中国の人々の反日運動	9	5	15
（各国の日本のとらえかたは?）			
△日本人の曖昧性	9	1	19
環境問題	7	7	15
ひとつのものに対する熱中の仕方	5	3	21
▲ニート（NEET）	9	2	18
日本の音楽と海外の音楽	8	5	16
戦争	5	6	18
専業主婦	7	3	19
自衛隊	5	7	17
日本食	5	5	19

後半は、学生が提案したトピックを中心に、関連性のあるトピックを複数まとめて、それぞれ2回の授業にわたって討論することにした。まず、表2の○のついたトピック（外国から見た日本の印象、海外のマスメディアが報道する日本、今起きている中国の人々の反日運動（各国の日本のとらえかたは?））をひとつにまとめた。さらに、△のついたトピック（異なる国の人々の相互理解、コミュニケーションの重要性、日本人の曖昧性）をひとまとめにした。また、▲のニート（NEET）は、前半で提案していたものの取り上げなかったふたつのトピック（仕事への意識、フリーター）と組み合わせた。「仕事への意

識」については、前半と同様、日本語テキストから抜粋した資料があったので、このトピック群を後半の最初にもってきた。（なお、もうひとつ▲のついたトピック（外国の中の日本人）は、前半の「日本の外国人」が逆転したトピックであり、どのグループも前半の討論である程度取り上げていたので、後半ではあえて取り上げなかった。）

このように、後半ではトピックに広がりをもたせ、2回連続で討論することにしたので、一人の座長が取り仕切るには荷が重いと思われた。そこで、それぞれのトピック群に留学生を含む3、4名の企画グループを設け、あらかじめどのように討論を進めるかを討議し、下調べを行い、それを企画書にまとめて提出させた。トピック群は、ひとつひとつを順番どおりに忠実に取り上げなければならないわけではなく、討論のガイドラインと考え、そこから全く無関係なトピックへ大きく外れるのでない限り、柔軟に対処し、グループ毎にユニークな企画を生み出すことを奨励した。

3. 期末レポートと成績評価の方法

期末レポートは、中間レポートと同じくレポート用紙2枚程度に、以下の題目で書かせた。

「私の日本社会論：	（副題をつけること）	」
「私の日本文化論：	（同上）	」
「私の日本人論：	（同上）	」

上記3つの題目からひとつを選ばせ、日本人学生は、外国へ行って、日本を知らないその国の人々に日本を紹介するつもりでスピーチ原稿を書き、留学生は、自分の国へ帰って、日本を知らない自国の人々に日本を紹介するつもりでスピーチ原稿を書く。内容は、断片的な知識や見聞の羅列にならないよう、具体的な副題をつけて、ひとつないし二つ、三つの関連性ある特色を論じる、まとまりのあるレポートとするよう指示した。

成績は、この「期末レポート」を40%、「中間レポート」を30%、「出席」を20%、「討論への参加度」を10%の割合で評価した。本来、「討論への参加度」ないし「貢献度」の評価割合をもっと高くしたいところであったが、全部で30人という予想外の人数になり、個々人の参加度を十分に観察できなかったためパーセンテージは低くせざるを得なかった。

4. 中間レポートと期末レポート

中間レポートは、全員が「日本の外国人」、「日本の教育問題」、「若者の感性」の三つのトピックからひとつを選んでいった。以下、それぞれのトピックについて、多少省略しながら、ひとつずつ例を挙げておく。

例1（日本の外国人）

「日本の外国人」というテーマは日本の学生も留学生も話したいことが多くあったが、外国人への偏見とその原因を中心にして共に考えてみた。

まず、「外国人のイメージはどんな過程で形成されるか」ということに関して討論した。日本人と留学生の意見は大体一致した。第一段階は「恐怖」の段階である。大抵の場合、外国人に初めて会ったのは子供の時だった。自分と顔つきが違い、知らない言語を使う外国人に会って、漠然と恐怖を感じたという。韓国と中国は日本と同じ東洋人だから少し違うが、全員が他の民族の外国人を見て恐怖を感じてしまったことがあった。第二段階は「好奇心」を持つ段階である。一時的な恐怖ではなく、自分と違う存在に対して好奇心を持つようになる。この段階で外国人のイメージを決めるようになると思う。しかし、この段階では外国人に対して客観的な理解ではなく、自分が知らないうちに社会の視覚や周りの人たちの観点によって決まってしまう。これが原因で外国人に対する偏見に取り付かれる。第三段階は「客観的な理解」をする段階である。この段階で偏見を捨て、自分の文化と異文化の差を認識して外国人を客観的に理解できるようになる。だが、大体、第二段階で断定してしまうから問題だと思う。共に話した日本の学生たちや留学生たちのほとんどが、この授業の前には外国人と一定のテーマについて自由に話せるチャンスがなかったと言った。

…（次いで、）「外国人への偏見の原因」を探してみた。第一にマスコミの影響は思ったより強かった。他の国のイメージに関して我々が反していたことの大部分がマスコミを通しての情報だった。しかし、マスコミに出る外国の情報は大きな事件や自分の国に関係することのみなので、客観的な観点ではない。…マスコミ以外には外国に関する情報を得る機会があまりないため、マスコミが作る外国のイメージに依存してしまう。…第二に教育も重要な原因のひとつだった。21世紀は国際交流の時代で、国境の重要性は徐々になくなってきているが、まだ外国への正しい観点を持つための教育環境は不足だ。外国人と共に話す機会や異文化を経験してみるプログラムのように、世界化時代に必要な接近を教育を通して努力する方がいいと思う。…今回の討論によっ

て日本の学生と留学生はもっと客観的な目で他の国を理解して、偏見を捨てるようになった。（以下省略）

例2（日本の教育問題）

日本の教育問題について討論したことで私が持った感想は、アジアの国（日本、韓国、中国）は大体同じような状況にあり、ドイツはそれとは全く違うことである。Dさんの大学や他のドイツの大学は「授業料」というものがなく…受験戦争もないらしく、アジアの先進国と比べてとても自由な感じがした。討論はもっぱらドイツの事情とその他アジアの国の事情を比較しながら進んだが、アジアの国の中でも日本人がびっくりしてしまう違いがあった。日本の高校・中学は大体3時半には授業が終わり、あとは課外活動の時間になるが、中国や韓国は…夜の8時くらいまで学校で勉強するそうだ。私は日本が特に受験戦争の激しい国だと思っていたが実際は違って驚いた。また、Dさんも、日本、韓国、中国の大学受験事情を知ってとても驚いていて、「信じられない」と何度も言っていた。

このトピックでは…私たち学生が深く関わっていることでもあり、いろいろな意見がスムーズに出たと思う。私たちは割りと物静かな学生が多く、一通り意見が出尽くしてしまうとシーンとしてしまうことがよくあったが、このトピックでは、皆聞きたいことを積極的に質問していた。だが、討論会としてまとめることは難しく、どちらかというと座談会のような、…雰囲気だったので、もう一步前進した討論が出来ればもっと良かったと思う。…私たちの準備不足も討論がだらだらしてしまう原因だったと思う。前もって各国の事情を少しも調べておらず、思いついたばかりの質問をして、問われた人はそれに答えるだけでその話題は終わってしまう。これでは折角の討論の場が勿体ない。次からはぜひ討論となり得るような問題提起ができるようにしたい。（以下省略）

例3（若者の感性）

「今女の子の流行になっている、ジーンズの上に薄手のスカートをはく格好はおもしろい。しかし、すべての女の子が同じような格好をしているから個性がなく、皆同じに見えてしまう。」こういう意見が出た。確かに、制服でもないのに皆同じような格好をして生活しているように思えた。しかも私はその中の一人である。特に日本の

女の子達は、カリスマと呼ばれる芸能人やモデルの格好を真似する。そして周りとの違いに敏感で、周りに合わせようとする人種である。私はそのことに初めて気付いた。(中略) 視点を外国に移すと、日本とは全く違うことが分かった。中国では、日本ほど周りとの違いを意識しない。個性というものが表現される格好をする。…また「日本人がなぜそこまで周りを気にするのか不思議」というような発言もあった。私は少しショックを受けた。周りと違う格好をすると「個性的だね」と言われる。しかし日本の場合、この言葉がほめ言葉である確率は低い。特に女の子はこの言葉に敏感過ぎるから、なおさら自分の個性を失い、周りに合わせてしまう。(中略) 私はこの回で座長を務めた。…座長となると、討論内容の提供から始まり、ひとりひとりの意見に反応し、質問し、まとめて、と、やることがたくさんあり、とても難しかった。…今まで自分の意見を言うことが苦手で、司会等は全くやったことがなかったし、やる勇気もなかったが、今回、自分がこんなに意見を言えるんだと知り、司会も務め、良い経験が出来たと思う。(以下省略)

期末レポートでは、日本人論、日本文化論、日本社会論のうち、日本人論が最も多く、しかも日本人論のほとんどが「日本人の曖昧性」を取り上げており、「曖昧性」というネガティブな響きをもつ特質に対し、「他者への気遣いの結果生じるもの」という肯定的な説明を加えることが共通している。それらのうち二つを例示する。

例4「私の日本人論：曖昧性から日本人を見る」

「日本人は曖昧だ」とよく外国人から言われます。…好きか嫌いかをはっきり言わないし、相手に何かを伝えるときも遠まわしに言い過ぎて言いたいことが伝わらなかったりすることもあります。日本人は直接的に物事を伝えるのを避けようとするのです。

外国の方にとっては、日本人の曖昧性はマイナスイメージなのかなあと今まで思ってきました。「曖昧」という言葉には確かに「はっきりしない、まぎらわしく確かでない」という否定的な意味があります。しかし日本人の曖昧性は、相手のことを思いやる気持ちから形成されてきたものだったのだということを留学生と語る授業を通して改めて気付かされました。

…直接自分が本当に思っていることを言ったら相手は傷つかないだろうかなど、相手の気持ちを考えるからこそ曖昧な表現をした方がよいのではないかなと思うようになるのです。日本人は周囲のことを考えるという側面が強いのかもかもしれません。(中略)

しかし、自分の意見を持ち表現するということは非常に大切です。周囲を気にし過ぎるあまり自分の意見がいえないという状況が続くと個性が失われてしまいます。留学生と語る授業でも、留学生の人たちが自分の意見をしっかり持っていることに驚きと尊敬を感じました。…曖昧さも大切だけれど、意見を言う場所でははっきりと自分の考えを表現できることが社会からも求められているのです。（中略）

そうすると、曖昧性にはプラス面もマイナス面もあることになります。マイナス面は改善していかななくてはなりません。でもプラス面にも目を向けてほしいのです。どこの国の人でも相手と仲良くやってゆきたい、うまくコミュニケーションを取りたいと思っているのではないのでしょうか。日本人の曖昧性もコミュニケーションをうまく取ろうとするためのひとつの手段ではないかと思います。…曖昧性のプラス面を取り入れつつ相手とコミュニケーションをするということが大切なのだと思いました。

例5「私の日本人論：日本人の性格」

外国の方が「日本人は曖昧な言い方をする、はっきり意見を言おうとしない。」と言っているのをよく耳にします。例えば「明日遊園地に行かない?」と誘われたときに都合が悪ければ、多くの日本人は「明日はちょっと…」というような言い方をします。「ちょっと」というのは、明日は行けないということを意味し、その上、なぜだめなのかという理由も言わなくて済みます。

でも初めてその言葉を聞いた外国の人は、「ちょっとって何?行けるの?行けないの?」と戸惑うようです。私もよくそのような言い方をしますが、もし反対の立場だったら、YesなのかNoなのか、はっきり言えばいいのと思うでしょう。

留学生と日本人学生とで、この話題について討論しました。その際、ある韓国人留学生は、「最初は日本人の曖昧な言い方で困ったけど、今は日本生活にも慣れ、それも日本文化のひとつだから良いと思えるようになった」と言ってくれました。ストレートに言った方がいいとされる文化もありますが、日本では…婉曲的に言った方がいいとされる文化なのです。…

その他に日本では、謙虚な方がいいと考えている人が多いです。例えば「つまらない物ですが…」と言ってプレゼントを渡します。でも皆さん、この言葉を信じないでください。決してつまらない物ではありません。「あなたのために必死に探して、いい物を買って来ましたよ」と言うと、相手の負担になると思うので、…そう言わないのです。これも相手を気遣ってのことなのです。…

「日本人は自己主張をあまりしない」とも言われます。例えば友達同士で何か食べに行こうとする時、「何食べたい?」と聞かれ、「何でもいいよ」と答える人がいますが、これは自分の意見をはっきり言わないということではないのです。みんなが「〇〇食べたい」とそれぞれ言い出したら困るし、これも相手を気遣った謙虚な気持ちなのです。

しかし結論や意見を求められた際に、曖昧な言い方をするのは別です。中には対立を避けたいという気持ちで、中立的な立場を取る人もいますが、こういう時は自分の考えをはっきりと伝えるべきです。こういう曖昧性は改善するべきだと思います。(以下省略)

5. 授業の評価

授業の最後に、受講生に質問紙による授業評価を行ってもらった。結果を表3にまとめて提示する。

表3. 受講生による授業評価（有効回答数26名）

Q1 このコースを取ってよかったと思いますか

大変良かった(15) 良かった(9) 普通(2) あまり良くなかった(0) 取らなければよかった(0)

その理由は何ですか

大変良かった：

- ・いろいろなことに気付いた
- ・日本人学生といろいろなテーマについて話し合うことができた
- ・異国の文化に肌でふれてよかった
- ・普段深く会話する機会のない留学生とたくさん話し合うことができた
- ・日本のことについていろいろ考えることができた
- ・いろいろな国の友だちと笑いながら話せた
- ・いろいろな人の意見が聞けて自分の考え方が増えた
- ・他の国から見た日本の姿が見えた
- ・この授業以外ではこういうチャンスがない
- ・日本人の学生と直接いろいろな話題について話すのは楽しい

良かった：

- ・他国の意見が聞けた

- ・日本文化の不思議な点が明らかになった
- ・今まで自分が知らなかったことやできなかった考え方ができるようになった
- ・しゃべりながらいろいろなことを知るようになった
- ・いろんな国の人の意見をたくさん聞いて視野が広がった
- ・日本に対する様々な意見が聞けた
- ・普段話をすることの少ない留学生・他学部・他学年の人と会えた
- ・これだけ話し合えるクラスは他にないと思う
- ・留学生の様々な意見が聞けて良かった

Q2 自分にとって面白かった・役に立ったと思うトピックを1番から3番まであげてください

- 1番：日本人の曖昧性(6)、若者の感性(4)、フリーター(3)、外国から見た日本(2)、ニート(2)、仕事への意識(2)、日本の外国人(2)、コミュニケーションの重要性、中日問題、花見、教育問題、異なる人々の相互理解
- 2番：教育問題(6)、仕事への意識(5)、外国から見た日本(3)、コミュニケーションの重要性(3)、若者の感性(3)、ニート(2)、フリーター(2)、
- 3番：ニート(8)、日本人の曖昧性(3)、外国から見た日本(3)、花見(2)、教育問題(2)、コミュニケーションの重要性、仕事への意識、若者の感性、日本の外国人

Q3 討論したかったと今思うトピックがあれば、下を書いてください。(いくつでも可)

食文化、日本のメディアや映画、日本の音楽、日本語について、大学生活、将来について、日本社会での女と男の地位

Q4 グループ分けの仕方は良かったでしょうか？こうすればもっとよかった、ということがあれば書いてください

- ・良かった(10)
- ・後半のグループは留学生が二人休んでいたのも日本人の割合が多く、留学生の負担が大きかった。二人ずつ四人のグループで話し合うのも楽しそう。
- ・メンバーを3、4回変えたらいいと思う。
- ・メンバーを3回変えたらもっと新しい人と話せるからいいと思う。
- ・授業に来なくなってしまう留学生がいて、日本人ばかりになってしまう時も会ったので、比率をうまくいくようにしてほしい。

Q5 毎回の討論に十分に参加できましたか

十分に参加できた(8) 大体参加できた(16) あまり参加できなかった(2)

「あまり参加できなかった」と思う人は、その理由を下に書いてください。(いくつでも可)

- ・自分の知識が少な過ぎたから
- ・あまりトピックについて深く考えていなかった

Q6 討論の進行はうまく行きましたか

とてもうまく行った(2) 大体うまく行った(11) 普通(9) あまりうまく行かなかった(4)

- ・問題が多かった(0)

「あまりうまく行かなかった」「問題が多かった」と感じる人は、その原因や問題点はどんなことだと思いますか

- ・静かな人が多く、討論が盛り上がらなかった。
- ・もっと話題について調べればよかった。
- ・自分の知識が少な過ぎた。

Q7 この授業を、もっと面白く、また有意義にするにはどんなことをすればいいと思いますか

- ・もっと多くの国の人と話し合いたかった。
- ・もっと軽い話題も欲しかった。
- ・後半はもっといろいろなトピックについてディスカッションできればよかった(前半のように毎回違うテーマがあればいい)。
- ・留学生と日本人学生の割合を同じくらいにして、少人数制で。
- ・一回か二回くらいディベートがあっても良いと思う。
- ・もっといろんな国の人がいればもっと楽しくなると思う。
- ・トピックを選んで、それについて自分の意見を少しずつ書いて来るといい。
- ・留学生の数を増やす。
- ・もっといろいろな話題について話す。
- ・トピックをもっと細分したらもっと面白くなると思う。
- ・テーマについてもっと知識があったら、もう少し討論しやすくなる。
- ・討論の内容を増やしたほうが良いと思う。
- ・できればもっと様々な国の人と討論してみたかった。
- ・毎週討論するのもいいけれど、たまに違った communication activity (game) を加えるとまた面白いかもしれない。
- ・ひとりひとりが背景知識と意見をもつ。いろいろな情報を知らないで討論が進みにくい。

おわりに

留学生と日本人学生の合同授業を考案し、共通教育のシラバスに載せてみたものの、初めは果たして日本人学生がどれくらい関心を持つか、雲をつかむような思いであった。しかし蓋を開けてみると予想外の大人数が押し寄せ、今度は、学生たちの期待をなるべく裏切らないように出来る限りの人数を受け入れることと、指導の質を保つこととのバランスに苦慮しなければならなかった。

合同授業の真価は、討論を主としたセミナー形式でなければならないと考えていた。講義形式では、留学生と日本人学生が単に同じ教室に隣り合っただけで、彼らの間にコミュニケーションが生まれることはあまり期待できないからである。しかし、教員が中心となって討論を喚起していくセミナーは15名が限度である。今回はその2倍の学生を擁したクラスのため、全体を3つの討論グループに分けて、学生の主導権に期待する授業運営とならざるを得なかった。

このような授業形式は、思ったよりも良い結果をもたらしたようである。学生のレポートや授業評価では、対話が途切れて気まずい雰囲気になったとか、皆準備不足で討論が深化しなかった等、否定的な評価も出ていたが、筆者の観察では、どのグループも討論は概ね生き生きと行われており、それどころか、討論が勢い付くあまり声量が上がって、他のグループで互いの発言を聞き取りにくくなるような場面がしばしば見られた。そのため、学期の途中から、広いメディア・ホールを借りて、離れ離れにグループを配置したほどであった。

また、討論が深化しないとの反省に関しては、下調べをして授業に臨むよりも何よりも、学生たちがそもそも討論というものに慣れていないことを考慮しなければならない。それは座長の役割を振られた学生のほとんどが、どのように座を切り盛りしてよいのかわからず、受身になって、「発言が起こるにまかせる」状態に終始していたことから言える。加えて異文化交流経験が乏しい彼らの場合、とりもなおさずこのコースが楽しく面白い、毎回何らかの新しい発見がある、ということで、互に関心を持ち、積極的に参加する態度を身につければ、それが収穫と言えるのではないだろうか。

気になるのは、全学の留学生数270名余といってもその過半数は大学院生とその予備軍であり、学部の授業では、1クラスにひとり留学生がいれば良い方という現状である。そうした現状があればこそ、この合同授業に日本人学生が殺到するのであり、もっと多くの国の人たちと話したい、もっと多くの留学生をクラスに入れてほしい、というようなコメントが出てくる所以である。学生たちの多くは、大学がより国際化し多文化的状況になることを受け入れる能力を持っていると思われる。学生のこうした潜在的な期待に大学がどこまで応えられるかが今後の大学の命運を左右するのかもしれない。

参考文献

- 東 照二・小川邦彦・西蔭浩子著（1995）『中上級用日本語テキスト：日本の社会と経済を読む』
研究社
- 近藤安月子・丸山千歌編（2001）『中・上級日本語教科書：日本への招待』（東京大学 AIKOM 日
本語プログラム、東京大学出版会
- 佐々木瑞枝（2001）『日本事情：日本について考える素材集』北星堂書店
- 山本富美子（2001）『文科系留学生・日本人学生のための一般教養書：国境を越えて（本文編）』
新曜社